

私の留守宅は父亡きあと母が家を守ってくれておりました。当時、衣料は切符制で愛媛県織維製品配給会社の統制下にありましたが、業者の子弟を集めて会社を作り、私もこれに勤めました。

原料は軍隊払下げ品を取り扱いましたので業績は好調で、社員に特別ボーナスを出して大変喜ばれました。

戦友のほとんどは戦死しておりますので戦友会はありません。友の冥福を祈る毎日であります。

転属転属の軍隊でしたが幸運に恵まれ、非戦闘地区に転属させられたので現在の私があります。

大正生まれの宿命（一）

福岡県 竹下 繁

私は大正十一（一九二二）年十月三十一日、台湾台北市御成町で、原賀家の七男として生を受けました。父は警察官を天職とし、私が六歳頃に定年退職し、その後、煉瓦工場を設立し経営にあたりました。小学校は近所の建成小学校（生徒数千五百人位）に学びました。

五年生に進学しました年に、全国的に活動していた「少年団」に入団しました。規律も厳しくいわば軍隊の「ミニ版」でした。六年生の時、父母が「故郷に錦を飾る」台湾在住の先輩達の慣習に習って、故郷熊本県に帰郷しましたので、私も父母に連れられ熊本市に住むことになりました。住居は、天下の名園で有名な水前寺公園のすぐ傍で、今まで味わい得なかったほどのおいしい水でした。私はこの地で中学校生活を送りました。

昭和十一（一九三六）年二月二十六日に、世に言う「二・二六事件」が起こり、昭和十二年七月七日には日支事変が勃発しました。私の社会人としての第一歩は、三井鉱山（株）基隆鉱業所基隆三坑と称される炭鉱勤務でした。職場は八五パーセント九州各県人で助かりました。

昭和十六年十一月三日（明治節の祝日）父の急死が知らされました。死亡の原因は、山鹿町の祝日慣例の行事として運動会があり、七十二歳の父は六十歳台の一〇〇メートルリレーに出場して一等賞になり、賞品の竹箒を手「万歳！」と叫んでその場に昏倒し、医師の手当も空しく一言の言葉もなく、この世を去った由でありました。

私の徴兵検査は昭和十七年で、残念ながら結果は第二乙種でした。当時の現役入隊は甲種合格と第一乙種まででした。若い男性は軍人なるものが日本男子であり、出征兵士のいない家庭は肩身の狭い思いをした時代です。各戸の玄関には役所の

指示で軍人の家には「出征兵士の家」と言う表札がつけられていただけに第二乙種は家庭にとりましても残念な結果で無念でした。

昭和十八年徴兵の現役兵が入隊した三カ月後の夏頃「昭和十八年七月十五日入隊。所属部隊、船舶工兵第三連隊。場所、台南市安平」と記載された召集令状が届けられました。その召集令状は「赤紙」でなく「白紙」の教育召集の令状でした。従来は、現役入隊から一カ年位後に来るのに早すぎるなあとはい思いましたが、戦域拡大の時ではあるからと善意に解釈しました。

入隊期日まで僅かに七日間、多忙な準備でしたが、仕事の引継ぎも丸一日で済ませ、身の周りの品の保管を依頼、出発は統一された国民服に「奉公袋」と称する手提袋と着衣を送るための小包用品を用意し、残る日は挨拶廻りにあてて出発準備を終えました。

私は家族の中で出征第一号とあって、今日までいささか肩身の狭い思いをしていただけに、なん

となく励ましの言葉にも弾みを感じました。盛大な見送りを受け入隊し、僅かの期日で除隊では恥ずかしいなあと気にしておりましたら、先輩の軍隊経験者から「数か月で赤紙召集に切り替えられ、三年位の軍隊生活は続く、覚悟すべきだ、死ぬなよ」と激励されました。事実一カ月位で召集に切り換えられました。

入隊前日の夕刻、二年先輩の吉田さんと私のために、松永坑長をはじめ六十人余の人々が、仕事の疲れも見せず、出征祝賀の酒宴を盛大に催して下さいました。

この席での話題は主として新兵時代の心得の指導でした。

- 一 軍人は要領を本分とすべし
- 二 発声は大きな声で
- 三 支給品は盗まれたら盗み返せ

と軍隊のOBは経験談を話してくれました。軍歌と万歳三唱で激励会は幕となりましたが、河野技

師と奥様が「千人針」を持参して下さいました。

千人の女性が一針ずつ結んだ貴重な真心のこもった千人針。寅年生まれの女子は、年の教程針を結ぶことができると言うのは、寅は千里の道を越えて元気で帰るとの故事になぞらえての千人針でした。「武運長久」と刺繍され、銃後の護りと言う意味か。十銭（苦戦を越え）と五銭（死線を越え）の銅貨が縫いつけられている。常に腹に巻きつけると臍下丹田に力が入り、心が落ち着き、元気が倍増する。「必ず生きて帰るぞ」と叫びたくなる。弾丸除けのご利益のある千人針でした。有難く頂戴し、昭和十八年七月十五日、多勢の人々の激励と軍歌と万歳の声に送られて台南市へと向かいました。

こうして「初年兵殺すにや刃物はいらぬ」と言われる軍隊に入隊しました。

入隊先は船舶工兵連隊の独立第三連隊第三中隊五所班でした。班長は五所と言う人で大分県生まれの柔道三段の猛者で、階級は伍長で、私より二

歳位上であったと記憶しております。班には、外
に上等兵二人と一等兵（通称古兵）二人が配属さ
れておりました。

我が班の悩みは、上等兵二人が班長より軍隊歴
即ち飯の数が多いため、班長が遠慮しているのを
いいことに教育係と称して「しごき」にかかる。
やれ「声が低い」「整理整頓が悪い」「上級者の靴
の手入れが悪い」等々。その都度全員に連帯責任
と称してビンタが加えられました。

他の班に負けると、時にはスリッパでの制裁が
加えられ、目から火の出ることもある。上級者は
都合が悪くなると「天皇陛下……」と言って直立
不動の姿勢をとらせて威圧する。当時の軍隊は戦
争という雰囲気の中で、各班の対抗意識が厳しい
状況を常に醸し出すのが絶対必要な世界だけに
我々はなじめなかった。この被害を最小限にとど
めるには、先輩に教えられた「要領を本分とすべ
し」を心掛けることだと実感しました。

こうして毎日が叱られ叩かれの厳しい訓練が繰
り返され、服従と忍耐の毎日でした。訓練は、午
前中船舶工兵としての訓練があり、その後、指名
により船舶関連の専門分野の訓練が引き続き行わ
れました。訓練は短期教育をめざしているので、
時には鉄拳制裁があり、初年兵は必死で覚える努
力をしました。

四十日を過ぎてても外出ができないため悶々とし
ていたある早朝、突然の非常召集ラッパで、かね
て訓示されていた出動であると了解し、第一正装
で素早く集合し連隊長の伝達を緊張して一言も聞
きもらさないぞと耳を傾けました。訓示は出陣に
当たつての激励でした。覚悟はしていたものの一
瞬全身に身震いしました。訓示後、全員に飯盒の
中蓋にお湿り程度の酒が振る舞われました。

これから原隊を離れて我々はどこへ行くのか一
切知らされない。ただ服装から考えると南方方面
と察しがつく。

部隊は第一中隊、第三中隊と野戦復帰の古年兵

が隊列を組んで営門を出て南へと行進致しました。行進すること三時間、大きな岸壁に到着しました。大きな声で「高雄港」だとの知らせで、初めて愈々南方方面と察しがつきました。直ちに乗船命令で我が部隊は中央部の一番下の船倉へ入りました。部屋割は座るだけの広さで、とても横になれるような広さはありませんでした。まさに鮪詰め状態で大海原へ出航しました。

早速、各連隊から敵潜水艦から発射される魚雷監視の見張りが交替でつくことになりました。我が中隊からは古年兵が指名され、初年兵は退避訓練が始まりました。驚いたことには、完全軍装で船底から縄梯子で船上に出ることでした。銃の扱いになれていない初年兵には重く、その上、安定もしない梯子を登るのだから大変でした。銃は菊のご紋章がついている兵器ですから、我々人間の間命より大切な悲しい時代でした。毎日島影一つ見えない洋上を走行する船の中で厳しい訓練は続けられました。

出航数日後の朝、甲板上より「島影！ 発見」の喚声でフィリピン島と知りました。我々も正式に南方派遣軍の一人となりました。久しぶりに人を見られるとあつて、多勢の兵隊が甲板上に集まりました。激戦地と言われた湾内のコレヒドール島要塞の生々しい傷跡や、到る所に砲弾の跡がくっきり見えました。その数たるやすごく多い。

これでは連合軍も後退せざるを得なかったと察しがつきました。こうして日本軍の戦果を目にしましたが、これが最初で最後になるとは、この時点では夢にも思いませんでした。

輸送船は静かに首都マニラ港へすべるように着岸しました。数日間の船底生活から解放された我々は、数隻の船艇に分乗してセブ島に上陸しました。ここが我々の教育駐屯地でした。この島に上陸して発見したものは、道路の両サイドは「マンゴー」の並木で、後でここは「マンゴー」の産地と知りました。

ここでの訓練は船舶工兵隊としての各専門分野を繰り返して指導を受けました。

入隊以来やっと半年を経過した頃、階級章が星二つの一等兵に進級しました。一等兵になった数日後、班長より近日中に前線に行くが、二カ所の基地に派遣されると言い渡されましたが、今回も行先は例により発表はありませんでした。せっかく親しくなった戦友と別れ別れになるかと思いと切ない気持ちになりましたが、命令となれば仕方ない世界が軍隊だと強く心に決めました。

翌日、早速第一陣の出発となり、我が班から約半数が出発しました。残った私達は旬日にしてマニラ市内へと移動しました。我々を運ぶ輸送船が二、三日後と知らされた日の翌日がちょうど日曜日で、入隊以来初めての外出許可が「門限付きの正味六時間」で下りました。私の目的は入隊前に設立されたフィリピン支所を訪ねることでした。

この支所には、会社の総務部長である中川さん(予

備中尉)が責任者として、会社から四十数人が単身赴任で現地炭鉱の増産を担当しておりました。中川部長は休日にも関わらず宿直者の連絡で駆け付けて下さったことに恐縮しました。

一年ぶりの面会が異郷の地とあつて話はずきませんでした。その上珍味に、久しぶりに満足感を味わいました。その後入隊して初めて軍服姿で指定された写真館で写真を撮り、出来上がり次第それぞれ留守宅への郵送を依頼し、お互いの無事と面会を約束して別れを惜しみました。復員後貴重な写真と対面できましたが、中川部長はじめ派遣されていた全員が「マニラ戦」で所在不明となり、残念ながら現地の土となられたことを知らされ、思わず合掌しご冥福をお祈りしました。

マニラ港を出港した輸送船は、あくまでも青黒い大海原を南下、赤道直下の燦々と照りつける太陽の光は海水に反射し眩しい。対潜水艦監視の見張りには、プロ級の海軍出身の船員二人が一組と

なり、交代で勤務してくれました。味方の駆逐艦が護衛はしてくれているが油断大敵、被害を事前に防止する役目は責任重大です。

船はある朝、とある島に横付けされました。こは当時日本が統治していたパラオ諸島でした。海岸には久しぶりに「日本国防婦人会」の襷を掛けた婦人の姿が美しく気高く見えました。ここで勇躍下船し日本茶のもてなしに預かりました。この島から見る風景がすごく美しかった記憶が思い出されます。この周辺は日本が制空権をもっていましたから、無事に南下できたこと知らされ、これから先が大変だと注意されました。数時間の休息の後、再び乗船して南方へと出港しました。

広い海原の見張りを強化しながら、また南方特有のスクールに遭遇しながら、疲労した身体はいつものように就寝時間になるとすぐ寝就きました。ある夜、夢の中に亡き父が大写しで顔面に笑みさえ湛えて現れ、その姿がだんだん小さくなり消えた瞬間、私は声もだせずに目が覚めました。翌朝

になって、夜中に魚雷攻撃を受け、船長の落ち着いた指令により船体かわし事なきを得たと聞き、亡父の出現は私を比護する為だったのかと感謝し瞑目しました。このことは私自身に勇気と元気を与えてくれました。

この事件から二日後、下船命令で上陸した場所はニューブリテン島のラバウル港と知らされました。ラバウルは入隊前に流行した「ラバウル小唄」が思い出されたからです。この歌はラバウル航空隊讃歌で、戦果をあげている心強い航空隊に気分を一新して兵舎に入りました。私達は新たに編成された小隊の班に集合しました。中隊長は野田中尉、小隊長は平場少尉（平成十一年没）でした。

数日後、我が中隊に「ガ島救援命令」が下り、上陸用舟艇が整備を終え、各人に渡された日の丸の鉢巻を締めて出航を待ちました。この時の私の任務は、中隊で唯一の速射砲担当で、敵襲されたら舟艇で一番狙われる部署でした。出港は安全を

期し深夜を待つことになり、数時間猶予ができたので休息のため一端陸上に集まりました。

この時、我々の第三中隊長の野田中尉が急性盲腸炎のため急遽交代して、第一中隊が任務担当と発表されました。突然のことでも不満でしたが、命令ならばと兵舎に引き揚げました。

数日後第一中隊全滅の報が伝わって来ました。目的地近くで敵機の空爆を受け撃沈されたのですが、我々の身代わりだったのかと、深い悲しみと共に全員で黙祷して冥福を祈りました。私にとりましては二度目の生命拾いでした。戦死者の中には同年兵が多数おりましたので尚更気の毒に思いました。

この作戦は、日本軍が一度占領し飛行場まで整備しておりながら、敵機の攻撃を受け逆に飛行場を占拠され状況が一変してしまいました。私が入隊する直前に、新聞紙上で「名譽の転進」と報告されていた作戦でした。この頃から敵機は大編隊

で爆撃に飛来してきましたが、我がラバウル航空隊の活躍ですべて沖合で空中戦が展開されました。

この迎撃作戦により敵と味方合わせて五十数機が入り乱れての空中戦で、まるで映画のワンシーンを見ているようでした。幸いにも煙を挙げて落下するのはすべて敵機ばかりで、その都度歓声をあげて「万歳」を叫びました。しかしこの状況も数日の夢で、敵側は数に物言わせ倍以上の数で反撃して来ました。

我々の部隊が海岸線から山中方面へと移動したのは、上陸から一カ月余りしてからでした。急変したのは航空隊の主力が後方支援の命令が出て、主力編隊が飛び立ったとの噂が伝わって来ました。これで制空権が消滅したのです。このため平地での行動は危険になりました。

数日を経ずして敵機が攻撃して来ました。我々は事前に察知して山中へと移動し難を逃れましたが、敵側は炊事の煙があがっていると必ず攻撃を加えるので、せつかくの食事が無駄になることも

しばしばありました。多分スパイによる情報か？
現地人が日本軍の劣勢で態度を変更し情報を流しているとも考えられました。そのため、兵舎と炊事場はますます距離が離れ、水のある場所も限度があるので止むを得ない方法でした。

攻撃の激化と共に、我々の作業にも大きく変更が迫られました。即ち日本軍十万人がすべて防空壕掘りを担当し、連日三交替で作業が続けられました。その防空壕掘りの方法も、敵の上陸に備えて湾岸を取り囲む状態で構築が命令され、それが我々の兵舎ともなりました。当時のラバウルには陸海軍合わせて十万人余と言われる将兵が「南海派遣軍」として駐留し、総司令官は今村均陸軍大将でした。

私が今村大将の姿を見たのは、連隊視察時に、道路歩哨勤務に当たった折、車中の姿を垣間見たのが一回限りでした。司令官は我々の体重の二倍半強と思われる巨体で、戦況に陰りが見え初めた

時期でもあり、堂々とした將軍の姿を見て、私
が心強さを感じたのは、最前線という地域の感情
からでもありました。

空爆は二日間隔位で、飛来して来る敵機に対抗
する友軍機は全く姿を見せず、もっぱら高射砲隊
の反撃で撃退が行われました。敵機は超高空から
重点的に一つ一つ破壊する攻撃方法で、迎え撃つ
高射砲の砲弾は遥か下で炸裂する有様でした。完
全に制空権は奪われ、戦況の不利を肌で感じるよ
うになりました。

このような状況を憂い合うことが許されないの
が軍隊であり、日本の教育でもありました。度重
なる空爆で死傷者が増え、我々の戦友からも数人
の戦死者が出ました。悲しい出来事でしたが、戦
地では悲しむ時間は消去され、戦況が不利になる
度に身につけたものは、逃げ足が早くなったこと
ぐらいでした。

上空からの攻撃になすべき方法のない悶々とし

た時間が数日間経過したある日、「出動命令」が降りました。任務は小型戦車の輸送でした。我々の艇に三輛搭載され、船揺れに対応するためのロープ結びが古兵の手で完璧になされました。出港は当然深夜でした。私の任務は軽機関銃担当で、艇の安全を守ることでした。行先は、艇長の小隊長が海図を頼りに航行する未知の島でした。

出港は月明かりが雲にかくれた頃を目度に、ゆるやかに、かつ航跡を短距離にして実施されました。

航行数時間、緊張感が少し薄れた頃、突然急降下の爆音が聞こえた瞬間、両舷に数条の水柱が立ち、艇は前後左右に大揺れし、小隊長の号令でエンジンをストックして航跡を消去すること、機関銃の射撃見合わせの号令が出ました。

敵機は五機の飛来が確認されましたが、南海の小島沿いの暗黒の中で、よく目標を発見するには、スパイの存在があったことと、それを追跡する技術には恐れ入りました。特に油断大敵と思いまし

た。攻撃を受けた時には、艦長以下五人全員呆然として立ちすくみました。もうどうにでもなれの心境で恐ろしいものなしの気持ちでした。

敵機は二、三回旋回し遠ざかりましたが、しばらく様子を伺いつつ全速で近くの島へ避難し、艇の目隠し作業に入り、空も白みかけたところに再度の襲撃を受けました。今度は機関銃掃射の洗礼を受け、我々は海中に飛び込んで全員が難を逃れました。敵機は艇五隻を集中攻撃し、すべて航行不能にして引き上げました。積荷共々全艇浸水の状態です、勿論、食糧も油まみれになり、我々は完全に島流しの状態となりました。

上官は直ちに三十人余の兵士を機械分解班と食糧調達班、監視班に分けて配置し、作業に入りました。私は機械分解班になり、まず軽機を陸上の食糧調達班に渡し、機関室に入り分解作業をして海中へ投棄しました。食糧調達班は、野豚一頭を機関銃で射止めたのが大収穫でした。野菜類は毒

性のある草木が多いから駄目と中隊長が判断されました。

この島は数年前から無人島になり、僅かトタン一枚が収穫で、早速、鉄板替わりに銃剣で無理矢理叩き切り豚肉を焼いて食べました。南方特有のスコールは確実にやってくるし、濡れた衣服は強い日差しで乾くから助かるが不潔そのものでした。

ラバウル島に上陸して原住民と接触した時に、違う体臭に違和感を感じましたが、それが数カ月で違和感がなくなっていることは、こちらの体臭も、スコールによる水浴び、食物も少量の米飯と椰子の実の木や油の原料となるコブラの身を食する等、原住民と同じ物しか食べられないため同化したのでしよう。